

二〇二二年度 第一回

国語 (50分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから37ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受験番号		

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

男の新しい下宿先は、七十の未亡人が孫娘と二人で暮らす一軒家の二階だった。町なかの勤め先から、自転車で四十分以上もかかる不便な場所だったが、それまで住んでいたアパートを大家とのちよつとした諍いで追い出された事情から、贅沢は言えなかった。

そこは海老茶色の瓦屋根に煙突が目印の、古ぼけた家で、野菜畑と果樹園の間を縫う農道に面していた。他に下宿人はおらず、男には二階の二部屋が与えられた。南向きの窓からは、用水路の向こう側に、どこまでも続くスモモの林が見えた。

未亡人は愛想のないがさつな女で、すぐ近所にある組合直営の農産物販売所に勤めていた。赤ん坊のようによく肥え、心臓に**シ**ョウでもあるのか、**シ**ジュウ息を切らしていた。

男は町にたった一つだけあるホテルの、ドアマンだった。十代の終わりから四十年近く、ただひたすらホテルの玄関に立ち続け、定年ももうすぐ間近に迫っていた。お客を出迎え、荷物を運び、車を誘導し、玄関マットにクリナーをかけ、回転扉のガラスを磨き、タクシーの**テ**ハイをし、トランクに荷物を積み込み、お客を見送る。それが男の仕事だった。

新しい部屋の住み心地はおおむね良好と言えた。以前のアパートより広々とし、風通しがよく、何より家賃が安かった。ただ一つ悩みがあるとすれば、それは未亡人の孫娘だった。

(中略)

孫娘がいつどんな時も、誰に対しても、一言も喋らないというのを知ったのは、引越してから十日ほどたった頃のことだった。

「あの子が挨拶一つしなくても、私の躰がなつてないからだなんて、思わないでおくれよ」

庭先で自転車の油を差していた男に向かい、未亡人は言った。

「昔はちゃんと喋ってたんだ。普通の子と同じように、アーアー、ウーウーからはじまって、マンマ、ママ、パパ、とね。もつとも

パパは家出しちゃって、行方知れずになっちゃっているけど。いや、普通以上だったかもしれない。絵本だつてすらすら読んでたし、童謡も上手に歌ってた」

尋ねもしないのに未亡人は一人で喋った。幾人もの人に同じ話をしてきたらしく、淀みがなかった。

「ところがちょうど一年前、あの子の母親が死んで、私が引き取ったその日から、ウンともスンとも口をきかなくなった。喉に何か詰まったのかと思って耳鼻科にも連れて行つた。児童心理何とかの先生に診てもらつて、ハコニワも作つた。乾布摩擦、指圧、鍼、飲尿、断食、全部駄目。今年、小学校に入学はしたけど、三日登校しただけだった。もうこうなつたら、本人が喋りなくなるまで待つしか、他に方法がないと思わないかい？ あの子がどんな声をしてたか、私はもう忘れてしまったよ」

未亡人はため息をつき、農道脇の切り株に座っている孫娘を見やった。自分のことが話題にのぼっていると気づいているのかいなのか、ムシンに少女は小枝で地面に絵を描いていた。

「じゃあ、今月分の家賃、そろそろ頼みますよ」

言いたいことだけ言うと未亡人は、家の中へ入っていった。

その後もしばらく男は、自転車の整備をしていた。本当はさほどの整備を必要とする状態でもなかったのだが、少女の背景をわずかながら知らされた今、彼女を全く無視していいのか、それはやはり礼儀に反するのか、あれこれ考えているうちに、① その場を立ち去るタイミングを逸してしまつたのだつた。一片の雲もなく晴れ渡つた昼下がりで、スモモの林はまぶしい光に包まれていた。

その時、農道の向こうから一台の軽トラックがやって来た。道の窪みに車輪を取られながら、大儀そうにガタガタと走っていた。舞い上がる砂埃と日の光の中から、荷台に隙間なくびっしりと積まれた、色とりどりの、ふわふわと柔らかそうな何かが少しずつ近づいてきた。

男と少女は同時に立ち上がった。その荷台は、古ぼけたトラックの様子とは不釣り合いに、ピンクや黄緑やブルーや朱色が混じり合った、愛らしいマーブル模様で彩られていた。しかも模様はひとときもじつとしておらず、たえずうごめいていた。やがてエンジン

音をかき消すほどの、にぎやかすぎるさえずりが聞こえてきた。トラックは男と少女の間を走り過ぎていった。

ひよこか……と男はつぶやいた。どこかの縁日で売られるのだろう。さえずりはトラックが遠ざかった後も、風に乗って耳に届いてきた。少女は切り株の上で爪先立ちをし、じっと農道の先を見つめていた。マーブル模様が小さな一点になり、とうとう見えなくなってもまだ、背伸びをし、耳を澄ませていた。

あたりに静けさが戻り、砂埃が晴れ、ようやく少女が切り株から下りた時、不意打ちのように二人の視線が合った。またしても男は訳もなくうろたえ、それを悟られまいとして機械油の染みたぼろ布を握り締めた。相変わらず彼女は黙ったまま、視線を動かす気配は見せなかった。

あれは、ひよこ？ ひよこよね。ああ、そうだ。ひよこだ。やっぱりそうなのね。ひよこだったんだわ。

その瞬間、二人の間に、身振りでもない、もちろん言葉でもない、^②ただ、ひよこ、という名の虹が架かった。得心した様子で少女は、地面の絵を運動靴で消し、スカートの埃を払い、庭を横切っていった。その後ろ姿を見送りながら男は、自分だけに聞こえる小さな音で、自転車のベルを鳴らした。

ある日、夜勤明けの男が帰宅すると、階段の中ほどに少女が座っていた。

おはようと言っても返事が返ってこないのは分かっている。脇をすり抜けて二階へ上がるには、スペースが狭すぎる。お嬢ちゃん、ちよつとすまないがどいてくれるかな、と言って無視されたら、A 事態はややくしくなる。しかしB、彼女はどうしてこんな所に腰掛けているのか？ もしかして自分を待っていたのではないだろうか。いや、待つ必要がどこにある？ こんな自分に、一体、何の用事がある？

男は自問自答を繰り返した。少女を前にすると、なぜか余計なことを考えすぎてしまった。なのに少女が何も悩んでいないように見えるのが、不公平に思えた。天窓から差し込む朝日が、ちょうど彼女の上に降り注いでいた。未亡人はもう販売所へ出勤したらし

く、家の中はしんとしていた。

唐突に少女は、男に向けて掌を差し出した。言葉の前置きがないために、男にとって、彼女のすることはすべてが唐突なのだった。掌には、セミの抜け殻が載っていた。

うん、間違いない。セミの抜け殻だ。よく目を凝らして男は確かめた。ここから何かを読み取る必要があるとすれば、これは難問に違いない。まず、もうセミが鳴く季節になりましたね、という時候の挨拶と考えることができる。子供だって、時候の挨拶くらいはするだろう。あるいは、自慢かもしれない。今年初めてのセミを見つけたのは私だと、自慢しているのだ。もしかすると、自分を驚かせようとしているのではあるまいか？ 急に気味の悪いものを見せて、びっくりさせて、大人をからかおうという魂胆だ。ならばもう手遅れではないか。自分はちつともびっくりなどしなかった。

改めてよく見れば、少女の手は本当に小さかった。男が知っている、どんなものよりも小さかった。掌は、セミの抜け殻一個で一杯になるほどの面積しかなく、指はどれも、これで役に立つのかと心配になる大きさで、爪にいたっては、老眼の目にとって無いも同然だった。にもかかわらず、ちゃんと大人と同じ形を持ち、関節も動き、指紋も手相もあることが、不思議だった。

その手の様子から、セミの抜け殻が単なる挨拶や脅かしでないことが、男にも分かってきた。抜け殻の足先一本でも傷つけないようにしようとする緊張が、掌にあふれていたし、息でどこかへ飛んでいかないよう、唇はしっかりと閉じられていた。それは彼女にとっても大事な抜け殻なのだった。

少女はそれを、男の胸元に差し出した。

「私に、くれるのかい？」

少女はうなずいた。③ 男は細心の注意を払って抜け殻をつまみ上げた。あまりにも軽く、間違えて彼女の指をつまんでしまったのかと、錯覚するほどだった。男が礼を口にするより前に、少女は階段を駆け下りていった。

男はセミの抜け殻を窓辺に飾り、しばらくそれを眺めたあと、ベッドにもぐり込んで眠った。

男が窓辺で過ごす時間のなかで一番好きなのは、夜明け前だった。闇が東の縁から順々に溶け出し、空が光の予感に染まりはじめる。一つずつ星が消え、月が遠ざかる。世界がこんなにも大胆に変化しようとしているのに、物音は一切しない。すべてが静けさに包まれて移り変わってゆく。

少女を真似て、男はセミの抜け殻を手に載せた。これは、プレゼント、というものののだろうか？ 夜明け前の静けさに向かって、男は問いかけた。かつて自分が誰かから、何かをプレゼントされたことがあったかどうか、思い出してみようとした。目を閉じ、遠い記憶を呼び覚まそうとしてみた。けれど、何一つ浮かんではこなかった。

だから男には、このセミの抜け殻が本当にプレゼントなのかどうか、正しく判断できなかった。自分がプレゼントだと思い込んでいただけで、少女の方にはちっともそのつもりがないとしたら大変なので、できるだけ抜け殻のことは考えないようにしているのだが、窓辺に腰掛けると、^④ どうしてもそれを掌に載せてしまうのだった。

いつの間にか星は残らず姿を消し、朝焼けが広がるようになっていた。生まれたばかりのか細い光が、一筋、二筋、果樹園に差し込んでいた。しかし静けさはまだ、夜の名残に守られ、男の手の中にあつた。抜け殻に朝日が当たるまで、もうしばらくかかりそうだった。

セミの次に少女が持ってきたのは、ヤゴの抜け殻だった。次がカタツムリの殻、ミノムシの囊、蟹の甲羅、と続いていった。圧巻はシマヘビの抜け殻で、直径二センチ、全長は五十センチもあり、それ一つで窓辺のスペースの半分近くを独占した。日に日に窓辺の抜け殻コレクションは充実していった。

少女はそれらを眺め、満足そうな表情を見せた。二人は時折一緒に、窓辺の時間を過ごすようになった。少女はコレクションの前にペタンと座り込み、男はその折々で、手持ち無沙汰に立っていることもあれば、彼女のためにジュースを注いでやることもあった。

最初のうち男は、こんなにも年の離れた、しかも喋らない人間と、どう間を持たせたらいいのか戸惑ったが、すぐに要領をつかんだ。つまり、抜け殻を眺めていればいいのだ。それで二人には何の不足もなかった。

どの抜け殻にも、眺めれば眺めるほど、新しい発見があった。男がまず驚いたのは、脱皮した殻が実に精巧な作りをしていることだった。セミの腹に刻まれた皺から、頭部の先端に密集する毛まで。ヤゴの透明な眼球から、羽に浮き出す網目模様まで。かつて殻の中に生きていた生物の形を、克明に留めていた。隅々まで神経が行き届いていた。どうせ脱ぎ捨てられるものだから、といういい加減なところが微塵もなかった。

更には、それほど精巧でありながら、綻びがないのだった。背中に一箇所、ファスナーのような切れ目がある以外、どこも破れたりクシャクシャになったりしていない。シマヘビになると、そっくりそのまま裏返しになっていて、模様が内側に広がっているという手の込みようだった。

人間でもこんなに上手に洋服を脱ぐことは不可能だ、と男は思った。間違いなくこれは、プレゼントに値する驚異だ、と一人で確信を深めたりもした。

しかし男はこうした思いのあれこれを、少女に向かって言葉にはしなかった。返事がもらえないからではなく、お互い喋らないでいる方が平等だ、という気がしたからだ。たとえ喋らなくても、少女のそばにいれば、彼女が抜け殻について自分と同じような発見をしていることが、伝わってきた。

彼女はそれらの人差し指でつついたり、光にかざしたり、においをかいだりした。ちょっと考え込んだり、口元に微笑を浮かべたりした。少女が動くたび、肩先で三つ編みの結び目も揺れた。全部眺め終わった後は、順番と向きを間違えないよう、男が並べていた通りに元に戻した。

⑤ 男は抜け殻と同じように、少女についても次々と発見をした。小ささは手に留まらず、身体中のあらゆる部分に及んでいた。鼻も耳も背中も、ただ小さいというだけで、神様が特別丹精を込めた感じがした。髪の毛は甘い香りがした。瞳の黒色はあまりにも深

く、それが何かを見るためのものだとということ、忘れそうなほどだった。自分も六つの時は、こんなふうだったのだろうかと思うだけで、訳もなく哀しくなった。

「どこにいるんだい。さあ、ご飯の支度、できたよ」

台所で未亡人が、少女を呼んでいた。

ひよこトラックが二度めに農道を通った時、少女はちょうど男の部屋にいた。ガタガタとしたエンジン音の響きだけで、二人はすぐに何が近づいてきているのか分かった。男は窓を開けた。

同じように荷台は色とりどりのひよこで埋まっていた。例のさえずりも聞こえてきた。少女は顔を輝かせ、精一杯爪先立ちをした。吊りスカートが持ち上がって、パンツが見えるのではないかと、男は気が気ではなかった。しかし少女はそんなことにはお構いなく、少しでもひよこに近づこうとして窓枠から身を乗り出した。彼女が落ちないよう、男はスカートの紐を引っ張った。

ひよこよね。ああ、そうだ、ひよこだ。

二回めともなれば、目配せの確認も簡潔に済んだ。少女は手すりを握り締め、瞬きをするのも惜しいといった様子だった。風景の中で、そのトラックの荷台だけが別格だった。光を浴びる羽毛は花園であり、湧き上がるさえずりは歓喜のコーラスだった。

けれど男は知っていた。着色されたひよこたちは、長生きできないということ。縁日の人込みの中、ハロゲンライトに照らされながら、彼らは窮屈な箱に押し込められる。乱暴に首をつかまれ、足を引っ張られる。買われた先ではすぐに飽きられ、羽の色もいっしょかあせ、糞まみれになって衰弱死する。あるいは猫に食べられる。売れ残ったひよこは、箱の片隅で、窒息死している。

⑥ 少女が何も喋らない子供でよかったと、その時男は初めて思った。もし少女に、

「ひよこたちはどこへ行くの？」

と尋ねられたら、自分はきつと答えて詰まるだろう。本当のことを言うべきか嘘をつくべきか分からず、うろたえてしまうだろう。

しかし二人は言葉を発しないのだから、少女の黒い瞳の中では、ひよこはどこへでも行けるのだ。虹を渡った先にある楽園で、可愛い色の羽をパタパタさせながら、いつまでも幸福に暮らすのだ。

新しいコレクションとして少女を選んだのは卵だった。彼女が裁縫箱と卵を持って二階へ上がった時、どういふつもりなのか意図がつかめなかった。最初は卵を孵してひよこにしたいのかと思った。少女は裁縫箱から針を一本取り出し、それで卵をつつく真似をした。

ははあ、卵に針で穴を開けて、中身を吸い出したんだな。なるほど。卵の殻も立派な抜け殻だ。

早速男は作業に取り掛かった。これまでのコレクションは全部、少女が一人でどこからか見つけてきたものだった。しかし今回は二人の共同作業だ。自分の働きが大事なポイントとなる。セミやヤゴに負けない立派な抜け殻を完成させなければならない。だから男は張り切っていた。

できるだけ目立たない穴にするため、細心の注意を払って男は卵のお尻に針を突き刺し、そこに唇をあてがった。少女はベッドの縁に腰掛け、じっと成り行きを見つめていた。正直なところ男は生卵があまり好きではなかったのだが、期待に満ちた少女の瞳の前に、嫌そうな表情を見せることなどできるわけがなかった。平気、平気。私に任せておきなさい、という態度を保ち続けた。

やがてぬるぬるとした生臭い粘液が喉に流れ込んできた。唇に触れる殻はひんやりとし、ざらついていた。男は気分が悪くなりそうなのをこらえ、味わう暇を与えない勢いでそれを飲み込み続けた。すぼめた唇と殻の隙間から息が漏れ、奇妙な音がした。

だんだんに男は、縁日で死んだひよこを飲み込んでいるような気持ちになってきた。着色され、ぎゅうぎゅう詰めにされ、遠くへ運ばれた拳句、一人ぼっちで死んでいったひよこを、自分は今用っているのだ。少女に気づかれないよう、そっと花園に埋葬しているのだ。

男は目を閉じ、最後の一滴まで、すべてを吸い尽くした。少女はベッドの上で足を揺らしながら拍手をした。二人の間に、白い小

さな抜け殻が一個、残された。男はそれを窓辺のコレクションに加えた。卵はすぐに他の抜け殻たちと上手く馴染んだ。少女の拍手が一段と大きくなった。

⑦ 男は相変わらずホテルの玄関に立ち続けた。自転車を四十分走らせ、ロッカーで制服に着替え、回転扉の前に立った。タクシーが着くと、お客の手から荷物を受け取り、「本日、ご宿泊でございますか？」と尋ねた。フロントまで案内しているあいだに、もう次の新しい客が到着していた。男は一日中、ただ玄関の内と外を出たり入ったりしているだけだった。誰も男の顔など見なかったし、名前も覚えなかった。ごくたまに、「ありがとう」と声を掛けてくれる客もあったが、そのたびに男は、礼を言われるような何かを自分はしたのだろうか、という気分になった。

同僚のドアマンたちは皆、男よりずっと若かった。男より力強く、ハンサムで、制服がよく似合った。食堂やロッカーで一緒になっても、雑談することはなかった。彼らが男に話し掛けてくるのは、勤務のシフトを交替してほしい時だけだった。

新しい下宿に引っ越してから、一つだけ変わったことがあった。子供連れの客が来ると、つい少女と比べてしまうのだ。この子は少女と同じ歳くらいだろうか。いや、熊の縫いぐるみなど抱いているところを見ると、少女よりは幼稚だ。あのロビーで走り回っている子。あれはいけない。いくら子供でも分別がなさすぎる。少女ならきつと、背筋をのばし、何十分でも、もちろん静かに、ソファに座っていられるはずだ。こっちの子はどうだろう。身長も目方もほぼ同じくらいだが、顔は全く似ていない。少女の方がずっと可愛らしい……。こんな具合だった。

どうして少女が抜け殻を集めるのか、男は不思議に思わなかった。少女には縫いぐるみよりも抜け殻の方がよく似合っている気がした。抜け殻を求め、果樹園や用水路の水辺を探索している彼女の姿を思い浮かべるとき、男は涙ぐみそうになって、自分でも慌てることがあった。少女はたった一人で辛抱強く、草むらをかき分け、枝を揺すり、泥を掘り返す。白いソックスが汚れ、三つ編みが解けそうになる。ようやく少女は一個の抜け殻を発見する。ついさっきまで生き物だったのに、今では空っぽの器になり、見捨てられ

てしまった抜け殻。中には沈黙が詰まっている。⑧ 少女はそれを救い出し、大事に掌に包み、男の元へ走って届けるのだ。

三度目の時、少女はもう、ひよこトラックについて相当の知識を蓄えていたので、姿が見えるずっと前にエンジン音をキャッチし、階段を駆け下りていった。男も後を追いかけた。少女は切り株に立ち、いつそれがやって来てもいいように、体勢を整えていた。

少女は間違えていなかった。一本道のずっと向こうから、トラックはやって来た。ほらね。やつぱりね。

少女は得意げな顔をして見せた。

うん、本当だ。

男はうなずいた。

太陽を背に、トラックの荷台は、四隅までわずかの隙間もなくひよこたちの鮮やかな羽に埋め尽くされていた。たとえあと一羽でも、余分に乗せることは無理だろうと思われた。

男の目には、いつもよりトラックのスピードが遅く、ふらついているように映った。荷台が揺れるたび、さえずりは更にトーンを上げ、波のようにうねりながら空の高いところまで響き渡っていた。少女は切り株の上でジャンプしていた。

私たちにひよこを十分見せてやろうとして、わざとゆっくり走っているのだろうか。そう、男が思った時、トラックは二人の前を通り過ぎ、農道を外れ、草むらに入り込み、そのままプラタナスの木にぶつかって横転した。あっ、と声を出す暇もない間の出来事だった。

男は慌ててトラックに駆け寄った。運転手は自力で外へ這い出してきた。額から血が出ていたが意識ははっきりしていた。

「大丈夫か。しっかりしろよ。大家さん、大家さん。すぐに救急車を呼んで」

男は大声で家の中の未亡人に呼びかけた。それから運転手の首に巻かれていたタオルで傷口を押さえ、もう片方の手で身体をさす

った。

ふと、男が視線を上げると、そこはひよこたちで一杯ばいだった。視界の全てをひよこが埋め尽くしていた。突然とつぜん荷台から放り出された彼らは、興奮し、混乱し、やけを起こしていた。ある群れは意味もなくその場で渦巻うずまきを作り、ある群れは空に逃げようというのか、未熟な羽をばたつかせ、またある群れは身体を寄せ合い、打ち震ふるえていた。

その風景の中に、少女がいた。

「駄目だめよ。そっちへ行つては。車が来たらはねられてしまう。そう、皆みな、この木陰こかげに集まって。怖こわがらなくてもいいのよ。大丈夫。すぐに助けが来るわ。何の心配もいらぬの」

少女は彼らを誘導ゆうどうし、元気づけ、恐怖きょうふに立ち竦すくんでいるひよこを、胸むねに抱だいて温めた。色とりどりの羽が舞まい上がり、少女を包んでいた。

これが彼女かのじよからの本当のプレゼントだと、その時男は分かった。少女が聞かせてくれた声。これこそが、自分おただけに与あたえられたかけがえない贈り物おくりものだ、と。

男は何度も繰り返くし少女の声を耳によみがえらせた。⑨ それはひよこたちのさえずりにかき消されることなく、いつまでも男の胸むねの中に響ひびいていた。

【問1】 ㉠㉡のカタカナを漢字に改めなさい（楷書^{かいしよ}でいいいに書くこと）。

- (a) ジビヨウ (b) シジユウ (c) テハイ (d) ハコニワ (e) ムシン

【問2】 ①「その場を立ち去るタイミングを逸^いしてしまったのだ」とありますが、どうしてですか。最も適当なものを

次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 男は、少女の過去について考えるうちに、一人ぼっちの少女をその場に残したままにしてしまっただけなのか判断がつかないでいたから。

(イ) 男は、少女が口をきかなくなったことを知らされて、その理由をいろいろと想像してみたものの、結局のところは見当がつかなかったから。

(ウ) 男は、予想もしていなかった少女の不幸な境遇^{きょうぐう}を突然^{とつぜん}知らされ、目の前の少女をどのようにさめればよいのか分からなかったから。

(エ) 男は、少女の身の上について知ってしまったがために、そこにいる少女に対して自分がどのような態度をとればよいか決めかねていたから。

【問3】——②「ただ、ひよこ、という名の虹が架かった」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から

選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) ひよこへの向き合い方を見て、少女の中にも色あざやかな世界が広がっていることを男が理解した、ということ。
- (イ) ひよこという言葉が少女が理解したことが、後に少女が言葉を話せるようになることにつながった、ということ。
- (ウ) ひよこを見たことがきっかけとなって、少女と男の間に小さいながらも特別なつながりが生まれた、ということ。
- (エ) ひよこを一緒に見つめていれば少女と心を通わせられると気づき、男は晴れやかな気持ちになれた、ということ。

【問4】

A

～

C

に当てはまる語として、それぞれ適当なものを次の中から選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけないこととします。

- (ア) せいせい
- (イ) ますます
- (ウ) だんだん
- (エ) そもそも
- (オ) しばしば
- (カ) みすみす

【問5】

——③「男は細心の注意を払って抜け殻をつまみ上げた」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

少女からセミの抜け殻を差し出されたとき、男は、(1)

(ア) 少女の行為の意味をはかりかねて
(イ) 少女の態度に疑いを持ちはじめた
(ウ) 少女の生い立ちをおもんばかって
様々に想像

をめぐらしつつ、(2)

(エ) 抜け殻の部位の一つ一つをていねいに観察するのでした
(オ) 少女の視点に立って気持ちを読み取るうとするのでした
(カ) 少女の手の様子の細かいところまでを注視するのでした

その後、少女の様子を見て、

(3)

(キ) 目にするのがなかなか貴重な抜け殻を発見できて、少女が興奮している
(ク) 少女がひたむきに、自分にとっての特別な物を受け取ってほしいと望んでいる
(ケ) 少女が、せっかくの贈り物を受け取ろうとしない態度に対していら立っている
と思ひ、男は少女

に問いかけます。少女がうなずくのを見た男は、

(4)

(コ) 殻からに閉じこもろうとする少女をいたわるように接したのです
(サ) 美しく作られた抜け殻を壊さないように大切に扱あつかったのです
(シ) 少女の一寸いちずな思ひを自分なりに受け止めようと考えたのです

【問6】

④ 「どうしてもそれを掌てのひらに載のせてしまうのだった」とありますが、この時の男の様子として最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 贈り物として抜け殻をもらってはみたものの、この抜け殻にそれだけの価値があるとは思えず、目を引く特徴とくちょうがな
いかと探している様子。

(イ) 少女にとって自分ばかりの対象なのではないかと感じ、自分もこの抜け殻のようにもてあそばれているにすぎ
ないと思っている様子。

(ウ) この抜け殻にどういう意味が込められているかは分からないが、他ならぬあの少女がくれたものだからと、心が引
き寄せられている様子。

(エ) はじめて贈り物をもたらったという喜びを感じるとともに、このことをきっかけとして少女と会話ができるかもしれ
ない、と期待する様子。

【問7】

——⑤「男は抜け殻と同じように、少女についても次々と発見をした」とありますが、これに関する次の説明文を読み、文中の a ～ d に当てはまる語句を後の選択肢から選び、それぞれ (ア) ～ (ク) の記号で答えなさい。

男は、抜け殻を a によって、それが b だ、ということに気づくのでした。

こうした抜け殻への発見と同時に、男は少女に対しても認識を改めていきます。出会った当初、男にとって少女は c だったわけですが、 a によって、少女も実は b であるということを、改めて発見するのです。その発見は男にとって d に思いを馳せるきっかけともなったのでした。

- (ア) ありふれた存在 (オ) どこか気味の悪い存在
- (イ) 自分を悩ませる存在 (カ) かつての自分自身の姿
- (ウ) 懸命に探し出すこと (キ) どうせ使い捨てられるもの
- (エ) つぶさに眺めること (ク) 繊細に作られた特別な存在

【問8】

——⑥「少女が何も喋らない子供でよかったです、その時男は初めて思った」とありますが、どうしてですか。最も適当なものを次の中から選び、(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 「ひよこトラック」を初めてみた時、少女と話ができるかもしれないというあわい期待を抱いた。しかし、今はひよこの悲惨な末路を話したところで、少女が受け止めることは難しいだろうと感じたから。
- (イ) 男は、会話がないうことで、一方的に悩まねばならないことが多かった。しかし、どうあがいても少女の思いは分かれないことに気づき、少女の本心を理解することは難しいのだと、あきらめがついたから。
- (ウ) 出会ったころは会話ができないことをもどかしく思ったりもした。しかし、この時は言葉を交わす必要がないため、

少女の思いを傷つけずにすむし、また嘘をつかなくてもすむことをありがたく思ったから。

(エ) 男はこれまで、少女が再び声を発することができるよう努めてきた。しかし、少女に残酷な未来を見せつけて少女を傷つけるくらいなら、この先も少女の声が聞こえないままであるほうがよいと思ったから。

【問9】

——⑦「男は相変わらずホテルの玄関に立ち続けた」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

四十年近く働き続けている男の仕事は(1)

(ア) 柔軟な対応が必要とされる繊細な内容
(イ) 張り合いもなく時間をもてあますもの
(ウ) かわりばえのない単純作業の繰り返し

であり、そのうえ、

共に働く若い同僚たちからは(2)

(エ) 煙たがられている
(オ) 軽んじられている
(カ) 一目置かれている

のでした。

また、男の方も、(3)

(キ) 自分の扱われ方に怒りを覚えずにいらなかった
(ク) 自分から人とのつながりをつくってはこなかった
(ケ) 自分の不器用な生き方を正そうとしてこなかった

ようです。男は長くこのホテルに勤めていながら、(4)

(コ) うつろな存在である
(サ) 厄介者とされている
(シ) 必要とされていない

と言えるでしょう。

そんな「抜け殻」のような男の心に、変化をもたらしたのが少女の存在だったのです。

【問10】

⑧

「少女はそれを救い出し、大事に掌に包み、男の元へ走って届けるのだ」とありますが、これに関する次の説明文を読み、文中の a ～ e に当てはまる語句を後の選択肢から選び、それぞれ (ア) ～ (コ) の記号で答えなさい。

少女から繰り返し抜け殻を受け取るうちに、男が a に気づいていったことは、男自身に変化をもたらします。仕事中、客に関心を払ってこなかった男が、ホテルに来る子どもたちを、少女と比べて b だと思うようになるのです。そんななか、男は、少女が抜け殻にこだわりを持つことも当然だと思うようになります。一般的に、抜け殻とは c と思われがちです。しかし、少女はその抜け殻を、d として見出している、と、男は感じているようです。

だからこそ男は、少女の掌から届けられた抜け殻を、窓辺に並べます。それはまさに、少女の思いがこもった大切なものを e へと置きなおす行為だった、と言えるでしょう。

- | | |
|----------------|--------------------|
| (ア) 自然界の摂理 | (カ) 小さく可愛らしい存在 |
| (イ) 日の当たる場所 | (キ) 中身のない無意味なもの |
| (ウ) 躍動する肉体の力 | (ク) 誰にも知られない弔いの場 |
| (エ) 抜け殻それ自体の価値 | (ケ) 風通しのよい開かれたところ |
| (オ) 分別のない幼稚な存在 | (コ) 生命の息遣いが込められたもの |

【問11】

——⑨「それはひよこたちのさえずりにかき消されることなく、いつまでも男の胸の中に響ひびいていた」とありますが、
 どのようなことですか。次の説明文の(1)～(4)について適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。また、説明文
 中の a ・ b に当てはまる言葉を本文中より見出し、それぞれ3文字で 答えなさい。

「ひよこトラック」が横転したとき、少女は

- (1) (ア) うろたえ取り乱したひよこをなだめて安心させようとした
 (イ) 男が運転手を助ける姿を見ておのずから勇気がわいてきた
 (ウ) 自分が声をあげて助けを呼ばなくてはならないと自覚した
- のでしょう。少女の口からは、言葉が

あふれ出てきました。すなわち、言葉を失ったと周囲から思われていた少女の中に、

- (2) (エ) 言葉にはならない思いが詰まっていたのです
 (オ) 語るべき言葉がたくさん存在していたのです
 (カ) 明かすことのない秘密がかくれていたのです

このとき少女がひよこたちに向けて発した言葉と、男が運転手にかけて言葉には、同じ「a」という言葉
 が含まれています。その少女の言葉は「抜け殻」のような日々を送ってきた男をも救うものとして、彼の耳に届いた
 ことでしょう。だからこそ男は、その声を自分に対する「b」だ、と実感するのです。

- 男はこれまでは (3) (キ) 言葉がなくても少女と世界を共有することができる
 (ク) いつか少女も過酷な現実と向き合う日が来るだろう
 (ケ) 少女が手に入れた幸せな日々を何としても守りたい
- 、と考えていました。その

男が、初めて聞く少女の声に、深い感動を覚えます。その声こそが、男にとつて

(4)

- (コ) 古い抜け殻を脱ぎ捨てさせてくれるもの
(サ) 自分の内側を満たすかけがえのないもの
(シ) 言葉の本来の姿に気づかせてくれるもの

となったのです。

わないのだと思う。

あのころのわたしが憑かれたようにたびたび筆写したのは、つぎの詩である。

みぞれ 安東次男

地上にとどくまえに

予感の

折返し点があつて

そこから

ふらんした死んだ時間たちが

はじまる

風がそこにあまがわを張ると

太陽はこの擬卵ぎらんをあたたためる

空のなかへ逃にげてゆく水と

その水からこぼれおちる魚たち

はぼくの神経痛だ

通行どめの柵さくをやぶつた魚たちは

収拾しゅうしつのつかない白骨しつことなつて

世界に散らばる

そのときひとは

漁

泊

滑

泪にちかい字を無数におもいだすが

けつして泪にはならない

一九六〇年 詩集『からんどりえ』

難解な現代詩はきらいだと言う人たちは、きつとこんな詩を思いうかべてそう言うのだろう。作者の視点（比喩的な意味ではなく、肉体をもった人間としての目の位置）がどこにあるのだからつきりしないし、どんな場面をなんのために描写しているのかも、一見したところわからない。

わからないことをうけとめて肯定すればいいのに、「作者の感情なり意見なりがかならず詩のなかにかくされていて、それを発見するのがゴールだ」という考え方にとらわれていると、わからないことがゆるせない。

そういう気持ちでこの詩を読むと、「正解に到達できないのは自分の読解力がないからだ」という **B** か、その裏返しである「こんなわかりにくい書き方をした詩人がわるい」という **C** にしか行き着かない。

いったんそうなってしまうと、〈その水からこぼれおちる魚たち／はぼくの神経痛だ〉という独特の改行にしても、水と魚の超現実的なふるまいにしても、すべて **D** か鼻持ちならない気どりに見えてしまうだろう。そこから「こういう詩は誰にも伝わらないただの詩人の自慰行為だ。現代詩はつまらない」という結論までは一直線だ。③これは不幸な読み方である。

わたしがこの不幸な道に入りこまずにすんだのは、あまりにも無知で未熟な中学生だったために、かえってわからないのを当然のこととして受け入れられたからだろう。

一行一行の意味がわからず、一句一句まで分解してもわからない。はじめからおわりまでわからなかったからこそ、この詩を「

E 「として見るしかなかった、いや」 E 「として見る事が可能になったのである。

「知らない」「わからない」ということには独特の価値がある。

たとえば、日本画の画家たちは、西洋の透視図法（遠近法）を知って以来、「透視図法的に描けない」という能力をなくした、というのは画家の山口晃の重要な指摘である。

透視図法は写真にとったようなかたちに描けるので、そのかたちこそが「ものの真実のすがた」だと思いこみがちだが、じつは人間の目にうつるものの像は、カメラのとらえる像とはかなり異なる。たとえば人間の目は、視野の全域にピントをあわせておくことができない。だから、いま注目している小さな範囲以外は、視野という構図のなかにあっても、ほんやりとかすんでいるのだ。ピントをべつのところにあわせると、さきほどとは構図そのものがちがってきってしまう。

しかしいったん透視図法が「正しい見えかた」だと信じてしまうと、それ以外のかたちでもものの姿をうつしとることができなくなる。山口晃はこのことを「自転車に F ようになると、『自転車に G 』ということができなくなる（自転車に

H 能力をうしなう）」と言っている。

わたしは「自転車に I 」（詩句の意味を読みとれる）ようになる前だったからこそ、「みぞれ」という詩の図像的魅力を感じることが容易だったのはたしかだろう。

図像としてのこの詩はかぎりなく魅力的だった。

各行の長さが絶妙に計算されている。各行のおわりの文字を線でつなげば、絵画的で感じのよい曲線があらわれる（詩人はあまり

言わないけれど、これは詩にとってたいせつなことのひとつである。文字の部分を線でかこむと、なにかのかたかが現れるのではないかと思ったりもした。

この詩をくりかえしノートにうつしているとき、わたしは J 書きまちがえた。それは、漢字で書かれていることばと、ひらがなになっているところとをとりちがえて、無意識に書きかえてしまうのである。あとから見くらべてまちがいに気づき、こうした表記のつかいわけが非常に意識的になされていることを感じるのだった。

この詩にはさまざまな漢字がつかわれているが、それらは調和のとれた一グループを構成していると思える。つかわれた漢字すべてを抜きだしてならべたときに、モダンな雰囲気をもった一種の調和が実現される。そういうふうにととのえられているのである。画家が、画面の色彩のトーンを注意深く調和させていくのとおなじ気配りである。

だから、一般的には漢字で書くことが多いことばでも、ひらがなにしてあるところがある。「とどく」「あたためる」「ひと」「ちかい」などが、ここではひらがなで書かれている。

なかでも K 目をひくのが、「ふらん」ということばである。

これが「腐爛」であることは前後の感じからもすぐにわかるが、「とどく」や「ひと」が漢字で書いてもひらがなで書いても L 不自然ではないことばであるのに対して、「ふらん」はいかにもひっかかる。

わたしはこの「ふらん」にころろをうばわれた。「腐爛」ではなく「ふらん」でなければならぬのだと思った。つまり、「腐爛」と「ふらん」は明確に別のことばだという、詩人の考えを感じたのである。

詩は音読して味わうものだという「常識」がある。この常識は、一般の日本人の詩に対する考えかたをかなり強くしぼっているが、ふだんはとくに検証される機会がない。学校の教室では、無条件に、教材である詩を生徒に音読させるところから授業をはじめ、そうしない授業はほとんどありえない。

しかし、④ 安東次男の「みぞれ」は音読できないのである。

「腐爛」と「ふらん」とを読みわけようとしてみれば、そのことはすぐにわかる。われわれは「腐爛」と「ふらん」とを異なる発音やイントネーションで区別することができない。声に出してしまえばおなじものである。

音読することを第一義に考えれば、詩は、すべてひらがなで書かれても、やたらに漢字ばかりで書かれても、あるいはローマ字表記であつても、おなじものだとということになる。それは、⑤ 紙に書かれた詩を音読のためのたんなる譜面としてあつかう考え方だ。

しかし実際のところ、詩人は表記にたいへん気をつかう。「バラ」と書くのと「ばら」と書くのと「薔薇」と書くのでは、あたえる印象がぜんぜん違つてくるからである。安東次男も、「腐爛」とは明確に異なることばとして「ふらん」と書いたのである。

この問題はすぐれて日本語的な問題といえる。

英語で詩を書くときに「rose」のつづりをどのように書くか悩むということは絶対がない（イタリック体で書いたとしても、つづりそのものは変化しない）。つづりが違えば別の単語になってしまうか、意味がふうじなくなるかのどちらかだ。ほかのどんな言語でもおそらく同様である。日本語以外の言語において、ひとつの語を書くときに、それを表記する文字を（何種類ものなかから）えらびとるといふ問題は存在しないのである。

だからこの問題は、日本語で書く者にあたえられた特権的な悩みであり、日本の詩人だけがそこでつまづくことを許された落とし穴でもあるのだ。詩が、どの言語で書くかということと密接な関係をもった（翻訳の困難な）文芸である以上、日本語の詩はこの問題こそをまずはじめに悩むべきではないのか。安東次男はそのことをここで示しているのではないか。

「ふらん」という単語を、われわれは「腐爛」と区別しては発音できない。ということはこの詩は黙読用の詩なのであつて、音読用ではないのだ。

そのことは、詩のさいごの部分に並べられた漢字を読むとき、さらにはつきりする。〈漁／泊／滑〉は、「ギョ／ハク／カツ」と発

音すべきだろうか。しかしそれではなにも伝わらない。音だけ聞いても意味不明である。では、たとえば「すなどり／とまり／なめり」とでも読むべきだろうか。それはさらに問題外だろう。「M」ということが伝わらないからだ。

これらの漢字は、さんずい（水）という部首をもつ凶像として示されているとしか考えられない。これは、音読ができないように書かれた詩なのである。

「けつして」という表記もまた、読む者の目にちいさなつまづきをあたえる。全体は現代かなづかいなので、「けつして」と書かれていれば目は素通りしていくが、促音の「つ」が大きく表記されているとほんのちよつとだけひっかかる。

もっとも、この詩が書かれた時代には、促音の「つ」を小さい「つ」にはせず大きのまま表記する詩はたくさんあった。

（ 中 略 ）

日本のかな文字は表音文字だと思われがちだが、けつしてそうではない（「こ・う・こ・う・せ・い」と書くのに「コーコーセー」と読むことを思いだせばわかる）。安東次男も、「薄明はくめいについて」をふくむ詩集『六月のみどりの夜わ』の初版では、「きみらわやるだろう」（きみらはやるだろう）「腕うでのなかえ」（腕うでのなかへ）などの表記をためした（のちに現代かなづかいにあらためた）。

促音の「つ」をどう書くかというような問題も、詩人の悩むべき問題のひとつだ。

安東次男がなにと格闘かくとうしたのかをあきらかにするために、日本語の特性を、言語学者とはことなる角度からとらえている人のことばを参照してみよう。

中国語学・中国文学の専門家であると同時に、現代日本の（世間一般せいけんいぱんの）ことばの状況じょうきょうについての鋭い観察者でもある高島俊男は、西洋の言語学の「言語とは音声のことであり、文字はそのかげにすぎない」という考え方を認め、文字なき言語はけつして不備なものではないという。しかし、現在の日本語だけは例外であって、^⑥文字のうらづけがどうしても必要な言語になってしまったことを、つぎのように述べる。

〈漢語伝来以前数千年、あるいはそれ以上にわたって、日本語は、音声のみをもってその機能を十全にはたしていたはずである。文字のうらづけなしに成り立たなくなつたのは、千数百年前に漢語とその文字がはいってからのち、特に、明治維新以後西洋の事物や観念を和製漢語に訳してとりいれ、これらの語が日本人の生活と思想の中枢部分をしめるようになって以来である。〉

現代の日本にも、耳できけばわかることはたくさんある。高島俊男のあげた例は「みちをあるく、やまはたかい、めをつぶる、いぬがほえる、あたまがいたい」などだ。これらは、いちいち文字を参照しなくてもすぐに意味がわかる。それは、これらの日常的で具体的な語彙が、本来の日本語（和語）だからなのである。

ところが、やや高級な概念や明治以後の新事物にもちいられる漢語については、事情がちがう。高島俊男は、〈具体的、動作、形容、本来、高級、概念、以後〉などの例をあげてこういう。

〈これらの語も無論音声を持っている。けれどもその音声は、文字をさししめす符牒であるにすぎない。語の意味は、さししめされた文字になつている。たとえば「西洋」を、ひとしくセーヨーの音を持つ「静養」からわかつものは「西洋」の文字である。日本人の話（特にやや知的な内容の話）は、音声を手がかりに頭のなかにある文字をすばやく参照する、というプロセスをくりかえしながら進行する。〉

〈もとの漢語がそういう言語なのではない。漢語においては、個々の音が意味を持っている。それを日本語のなかへとりいれると、もはやそれらの音自体（セーとかケーとか、あるいはコーとかヨーとかの音自体）は何ら意味を持たず、いずれかの文字をさししめす符牒にすぎなくなるのである。〉

しかも日本語は音韻組織がかんたんであるため、漢語のことなる音が日本語ではおなじ音になり、したがって一つの音がさししめす文字が多くなる（たとえば日本語でシヨの音を持つ字、小、少、庄、尚、昇、松、将、消、笑、唱、商、勝、焦、焼、証、

象、照、詳、章、悄、掌、紹、訟、獎、等々。これらは漢語ではみなことなる音であり、音自体が意味をになっている。これらが日本語ではすべて「シヨ」になるので、日本語の「シヨ」はもはや特定の意味をつたえ得ない。〕

ひとつの「シヨ」という音でさえこうなのだから、複数の漢字をくみあわせてつくった熟語の場合にはさらに「音の種類がすくない」ことが欠点として露呈する。コーソーは高層、構想、抗争、後送、広壯のどれでもありうるし、ソーコーは壯行、奏効、操行、草稿、装甲のどれとも決められない。それをわれわれ日本人は「文脈を聴きとり頭のなかで文字を参照する」作業によって、かろうじて識別しているのである。

〔日本の言語学者はよく、日本語はなんら特殊な言語ではない、ごくありふれた言語である、日本語に似た言語は地球上にいくらかもある、と言う。しかしそれは、名詞の単数複数の別をしめさないとか、賓語のあとに動詞が位置するとかいった、語法上のことである。かれらは西洋でうまれた言語学の方法で日本語を分析するから、当然文字には着目しない。言語学が着目するのは、音韻と語法と意味である。〕

しかし、音声が無力であるためにことばが文字のうらづけをまたなければ意味を持ち得ない、という点に着目すれば、日本語は、世界でおそらくただ一つの、きわめて特殊な言語である。〕（引用はすべて高島俊男『漢字と日本人』文春新書より）

⑦ こうした文章を読むと、目を打たれたような気持ちになる。

日本語で書かれた詩を考えるうえで、日本語の特殊性は無視できない。日本語は音声言語としてはきわめて貧弱であり、ということとは、視覚情報におおきくよやかかった言語なのである。

【問1】

① 「日常的な文脈の外側にあり」とありますが、どういふことですか。最も適当なものを次の中から選び、(ア) ～

(エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 不謹慎な内容が含まれており、常識や良識の範囲から外れている、ということ。
- (イ) わたしたちの生活の役に立つものではなく、実用性に欠けている、ということ。
- (ウ) 豊富な知識がなければ読めないくらい、高い教養が求められている、ということ。
- (エ) 語と語のつながりが、慣れ親しんだものとはまったく異なっている、ということ。

【問2】

② 「とびきり奇妙で謎めいていて、あふれでるエネルギーを感じさせる」とありますが、どういふことですか。最も

も適当なものを次の中から選び、(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 奇抜なアイデアに富んでおり、いつまでも飽きさせないような力がある、ということ。
- (イ) 多くの謎に満ち溢れており、その謎を解読するためにめり込んでしまう、ということ。
- (ウ) 内容を把握することはできないが、だからこそ底知れない魅力で迫ってくる、ということ。
- (エ) 最初は理解することができないものの、次第に意味が理解できるようになる、ということ。

【問3】

A

に当てはまる言葉を次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 好きな小説の続編を考えて自分だけの物語をつくる
- (イ) 好きな漫画のキャラクターをまねしてノートに描く
- (ウ) 好きなドラマのセリフを覚えて登場人物になりきる
- (エ) 好きなゲームの必殺技を練習して友人に試してみる

【問4】

B

D

に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) [B] 劣等感れつとうかん | [C] こけおどし | [D] さかうらみ
- (イ) [B] さかうらみ | [C] 劣等感 | [D] こけおどし
- (ウ) [B] 劣等感 | [C] さかうらみ | [D] こけおどし
- (エ) [B] さかうらみ | [C] こけおどし | [D] 劣等感

【問5】

③「これは不幸な読み方である」とありますが、なにか「不幸」なのですか。最も適当なものを次の中から選び、(ア)

(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 詩人に対して偏見へんけんを持っていて、作品の「わからなさ」を詩人のせいにして、自分の読みまちがの間違まちがいに気づくこ

とできないことが「不幸」である。

(イ) わかりやすい作品を求めるがあまり、少しでも「わからなさ」をかく含んだ現代詩を読んだとき、実際以上の難しさを感じてしまうことが「不幸」である。

(ウ) 作品の「わからなさ」に直面しても、自分の読解力を向上させようとしないため、いつまでたっても現代詩の楽しみを得られないことが「不幸」である。

(エ) 作者の意図を探すことが重視される結果、「わからなさ」をそのまま認めることができず、現代詩はつまらないと判断してしまうことが「不幸」である。

【問6】

Eに当てはまる語を本文中より見出し、漢字2字で答えなさい。

【問7】

F } I には、「のれる」「のれない」のいずれかが入ります。「のれる」が入る場合は「ア」、「のれない」が入

る場合は「イ」の記号でそれぞれ答えなさい。

【問8】

J

L

をこ。

に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えな

(ア) [J] あながち — [K] とりわけ — [L] しばしば

(イ) [J] しばしば — [K] あながち — [L] ひとさわ

(ウ) [J] たびたび — [K] ひとさわ — [L] それほど

(エ) [J] とりわけ — [K] それほど — [L] たびたび

【問9】

——④「安東次男の『みぞれ』は音読できないのである」とありますが、どうしてですか。最も適当なものを次の中か

ら選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 「みぞれ」を音読するさいには、同じ表記のことばに対して、発音やイントネーションの区別が求められるから。

(イ) 「みぞれ」という詩は、音読したとしても、「ふらん」と「腐爛」が同じ意味であるということが伝わらないから。

(ウ) 「みぞれ」という詩は、音読して味わうものだという詩の「常識」を拒む^{こほ}ように、難解な漢字を多用しているから。

(エ) 「みぞれ」を音読してしまうと、「腐爛」と「ふらん」は別のことばであるという詩人の考えが反映されないから。

【問10】——⑤「紙に書かれた詩を音読のためのたんなる譜面ふめんとしてあつかう」とありますが、どういふことですか。最も適当な

ものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 音声を表記するための手段としてのみ文字をとらえる、ということ。
- (イ) 文字が音読を支える大事な要素であることに気づかない、ということ。
- (ウ) 実際に音読するときに、言葉のリズムや強弱を度外視する、ということ。
- (エ) 内容ばかり気になって、読んでいる人の声に注意を向けない、ということ。

【問11】

M

に当てはまる表現として最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 詩全体の冷たさが表現されている
- (イ) 三つとも水に関連する漢字である
- (ウ) 一文字の漢字が横に三つ並んでいる
- (エ) 音読みしたときにリズムが生まれる

【問12】

——⑥「文字のうらづけがどうしても必要な言語」とありますが、どういふことですか。最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 本来の日本語(和語)は、音声よりも文字のほうに支えられていた、ということ。
- (イ) 日本人の生活と思想の中心的な部分は、文字によって占められていて、ということ。
- (ウ) 現在の日本語において、言葉の意味の広がりをもたらすのは文字である、ということ。
- (エ) 日本語においては、同じ音を持つ事物を区別する根拠こんきよを文字が担になっている、ということ。

【問13】

——⑦「こうした文章を読むと、目を打たれたような気持ちになる」とありますが、どうしてですか。これに関する次の説明文の(1)～(6)について適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

筆者はここで、「目を打たれたような気持ち」という表現を用いて、高島俊男氏による日本語論を読んださいの印象を述べています。なぜ筆者は、高島氏の議論にそれほど感じ入ったのでしょうか。そのことを考えるために、まず高島氏の議論を確認してみましよう。

高島氏によれば、日本語の特性について考えるにあたって注目すべきは、明治時代、

- (1) (ア) 西洋語の発音が日本語の発声法に影響を与えた
 (イ) 西洋の概念が漢語を用いて日本語に翻訳された
 (ウ) 西洋語の輸入が一切の和語を駆逐してしまった
- という事実です。

こうしたいきさつを経たこともあって、ある時期以降の日本語は、耳で聞くだけでは理解しづらくなりました。というのも、現在の日本語においては、

- (2) (エ) 古来の日本語には存在しない発音が使われるからです
 (オ) 音声だけでは何も理解できない難解さがあるからです
 (カ) 音声は語の意味を識別する決め手にならないからです
- 。

このような性質の背後にあるのは、筆者が「貧弱」と表現した日本語の特徴に他なりません。つまり、

- (3) (キ) 音韻組織が単純で音の種類が少ない
 (ク) 名詞の単数複数数の区別が存在しない
 (ケ) 文字は音声のかけであるにすぎない
- という日本語の欠点が、

こうした事態をもたらしているのです。とはいえ、この欠点は一方で、

- (3) 日本語が何ら特殊な言語ではないこと
 - (4) 日本語を習得するのが容易であること
- を意味しているとも言えます。

(5) 日本語の視覚情報がゆたかであること
だとすれば、本文冒頭に描かれている、

- (6) 現代詩の意味内容を必死で理解しようとした
 - (7) 音読しながら現代詩の言葉を書き写していた
 - (8) 視覚的印象という面から現代詩に魅了された
- という筆者の中学生時代のエピソードの裏側には、

まさに「日本語の特殊性」の問題が潜んでいたと言えます。

高島氏による日本語論を読んだ筆者が「目を打たれたような気持ち」になったのは、その内容が、筆者が現代詩について感じた「衝動」の正体を言い表すようなものだったからでしょう。筆者にとって、

- (9) 表記法の違いなどものともしない現代詩
 - (10) 意味をとまわなくとも成立する現代詩
 - (11) 難解な意味をわかりやすく伝える現代詩
- との出会いは、

文字にこそ日本語の核心が宿るのだ、という「日本語の特殊性」を教えるものだったのです。

【出典】

I

小川洋子「ひよこトラック」『海』（新潮文庫、二〇〇九年）九五～一一五ページ

II

渡邊十絲子『今を生きるための現代詩』（講談社現代新書、二〇一三年）八四～九七ページ

